

移行支援としての高校教育

— 思春期の発達支援から、新たな高校教育のパラダイムを模索する —

企 画：	川俣 智路	大正大学人間学部
話 題 提 供：	川俣 智路	大正大学人間学部
	小野 善郎 #	和歌山県精神保健福祉センター
	保坂 亨 #	千葉大学教育学部
	田邊 昭雄 #	公立高等学校 校長
指 定 討 論：	松嶋 秀明	滋賀県立大学人間文化学部

[企画主旨]

特別支援教育が実施され、真に子どものニーズに即した教育が求められるなか、高校教育は一つの大きな岐路に立たされている。発達支援など高校教育に求められるニーズは多様化しつつ増大する一方で、現状の高校教育はこうしたニーズに充分には応えられてはいない。本ラウンドテーブルでは、高校教育を移行支援の場としてとらえ直し、「子ども」から「大人」への移行と、「学校」から「社会」への移行という2つの視点から、思春期の発達支援からみた高校教育のあり方を検討することを目的としている。当日は、発達論、発達精神病理学のそれぞれの観点からの報告、高校からの実践報告とその分析を通じて、移行支援としての高校教育という新たな枠組みをフロアとともに検討したい。

[話題提供]

小野善郎：高校生の移行支援の重要性と可能性～発達精神病理学の視点から～

思春期中期に相当する高校生の年代には、内向性および外向性の問題が顕在化することが多く、精神保健上のニーズも非常に高い。これらの問題は高校教育の「障壁」となってドロップアウトの要因になることもあるが、同時に成人への以降に向けた支援のきっかけになる可能性もある。高校生の移行支援では、単に横断的な不適応行動に介入するのではなく、それまでの育ちも踏まえて逸脱的な発達経路の修正を目指す発達精神病理学の視点が重要である。一人一人の育ちに基づいた発達支援こそが高校生の移行支援の根幹といえよう。

川俣智路：移行支援における高校と地域の連携を模索する～進路指導のフィールドワークから～

「子ども」から「大人」への移行支援は、高校在学時に限らず思春期から青年期にかけて継続的に必要なものである。したがって地域社会がその生徒の「子ども」から「大人」への移行をいかに引き続いて支援できるか、という移行支援の重要な課題となってくる。本報告では進路指導における、高校と地域社会の連携のフィールドワークから、その意義と可能性について検討したい。

田邊昭雄：具体例をとおして移行支援を考える

高校教育の現場で日々起こっている具体的な事例をとおして、それらにどのように教員が関わっていかようとしているかという意識の問題を中心に、移行支援の場としての高校について、その在り方を考えていきたいと思います。また、そのなかで校内連携だけでなく地域や保護者、あるいは他機関、他職種との連携・協働等を考えた時に、精神保健に重点をおいた形での学校保健委員会の効果的な活用や、一部で提唱されている教育相談コーディネーターの役割等についても併せて考察していければと思います。

保坂亨：思春期の心理発達とその支援

現代日本社会では、度重なる少年法の改正や国民投票制度導入による成人年齢の見直し（引き下げ問題）などによって、「子ども」と「大人」の年齢でさえも、その線引きが曖昧になりつつある。そうした中で高校生年代（15-18歳）は、第二次性徴をその入り口とする思春期にあたり、まさに「子ども」と「大人」のグレーゾーンに位置する。この高校生たちの発達を支援することは、文字通り「子ども」から「大人」への移行支援にほかならない。こうした視点から、あらためて思春期（高校生）の心理発達とその支援を高校教育という観点から考えてみたい。